

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 20 日現在

機関番号：32704

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26350796

研究課題名(和文) 男性身体の外見的理想像とジェンダー/セクシュアリティ間の矛盾に関する研究

研究課題名(英文) The Sexualization of Masculinity: Representations of Ideal Masculinity in Physical Culture Magazines and the Possibility of a Male Homosocial Continuum

研究代表者

岡田 桂 (Okada, Kei)

関東学院大学・国際文化学部・教授

研究者番号：90386657

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：1930-80年代の米国フィジカルカルチャー誌を資料として男性身体の理想がセクシュアリティ化されてゆく過程を分析した。その結果、1930-50年代のPC誌では男性身体の理想がセクシュアリティ化されておらず、多様な欲望の対象として共有されていたこと、60年代にかけて非ヘテロセクシュアリティ要素を払拭し、急速に異性愛化したことが明らかになった。こうした男性性のヘテロノーマティヴ化を促したのは、この時期進んだ“同性愛者”の可視化による、逆説的な異性愛アイデンティティの自覚化であった。また、1950年代以前のPC誌における表象は、異/同性愛で分断されないホモソーシャル連続体の可能性を示唆している。

研究成果の概要(英文)：The momentum of the (hetero)sexualization of masculinity was analyzed through physical culture magazines published from the 1930s-80s in the United States. The analysis revealed the following results: From the 1930s-50s, the ideal of masculinity was not yet hetero-sexualized and exemplified a broad range of desire which was not yet segregated as hetero/homosexual; From the 1950s-60s, PC magazines started to exclude non-heterosexual elements from their representations. The reason for the hetero-sexualization of PC magazines was a reaction to the increasing presence of homosexuals. It could be said that the rise of heterosexual self-consciousness itself was paradoxically caused by the creation and increasing awareness of homosexual identity. Moreover, these changes in the masculine ideal, and especially the examples before the 1950s, suggest the possibility of a homosocial continuum - namely, homosociality without discontinuity between homosocial and homosexual desire.

研究分野：スポーツ社会学

キーワード：男性性 マスキュリニティ マンリネス ホモソーシャルリティ セクシュアリティ 身体 フィジカル・カルチャー

1. 研究開始当初の背景

1990年代まで、ジェンダーに関する伝統的な定義は「身体の違いに付与される知識の全て」(ジョーン・W・スコット)というように、もっぱら身体自体の性差に関する社会的な制度・価値観ととらえられてきた。しかし、90年代以降、特にクィア理論の出現によって、こうした身体に完結したジェンダー理解は徐々に修正されている。この嚆矢として、イヴ・セジウィックは、男性ジェンダーの優位を、女性嫌悪(ミソジニー)による女性排除と同性愛嫌悪(ホモフォビア)による男性同性愛者排除の上に成り立つ、異性愛男性同士の排他的な関係であるとする、ホモソーシャルリティという概念で説明した(セジウィック:1985=1990)。ホモソーシャルリティは、特に男性ジェンダー(男らしさ)というものが、既に異性愛主義というセクシュアリティの概念を含んで成り立っていることを指摘した点で重要である。

この考え方に立てば、男性同性愛者がジェンダー(身体の外見)的には男性であっても、そのセクシュアリティ故に排除され、男らしさの理想を満たさない存在とされてきた理由も説明できる。

一方で、19世紀以降の近代社会は、男らしさの要素をその内面(精神性やモラルなど)よりも外見に求めるようになり、その際の理想として抛り所とされたのが、この時期急速に制度化されたスポーツや体育によって整えられた、いわば筋肉的なスポーツマン像であったとされる。(G.モッセ、M. Anton Budd, J.A. マンガン他)

研究代表者は、これまでもこうしたジェンダー/セクシュアリティ研究の枠組みを援用し、主に19世紀後半から20世紀にかけてのスポーツと身体の歴史社会的研究を行ってきた。今回、本研究ではその問題意識を20世紀後半(第二次大戦後から1970年代)まで進め、なぜ近代の男性ジェンダー・モデルから外れるとされた男性同性愛者が、なおも一貫して異性愛男性の(ホモソーシャルな)身体的理想像を共有してきたのかを明らかにする。

2. 研究の目的

本研究では、これまでジェンダーの領域とされてきた「男らしさ」の理想像---男性身体の外見的理想像が、実際にはセクシュアリティを含んだ概念であることを明らかにする。

具体的には、近代以降、男性身体的理想はスポーツマン的な筋肉美を中心とするようになったが、実際にはその美的基準を満たしていても、男性同性愛者は一貫して「男らしくない男」あるいは「欠格した男性」と見なされてきた。しかしその排除にも関わらず、男性同性愛者もまた、同じくスポーツ的な筋肉美という理想像を共有し続けてきた。この両者の矛盾は、ジェンダーとセクシュアリテ

ィが不可分であることを示す事例となりうる。

3. 研究の方法

本研究の方法は、1930-80年代までに米国で発行されたフィジカル・カルチャー雑誌(フィットネス/ボディビル元祖)の中から、異性愛男性読者に向けて発行されていたものとして主に「Strength and Health」、「Muscle Builder」を、同性愛男性向けに発行されていたものとして「Physique Pictorial」を対象とし、なるべく多くの号数を閲覧・収集してそこに表れた男性身体理想像を比較検討する。

フィジカル・カルチャーは、19世紀末のイギリスで流行した現在のボディビルの元祖ともいえるものであり、20世紀以降、米国においても様々なPC誌が創刊されると、大衆消費社会の進展とともに売り上げを伸ばし、イギリスを上回る中心的な市場となった。これ以降、「筋肉的な逞しさ」という視覚的な男性性の理想を一般に浸透させる上で大きな役割を果たすメディアとなり、その影響力は米国に留まらず、こうした身体像を世界的な男性美の理想として定着させることとなった。

一方、1950年代になると、フィジカル・カルチャー誌をカモフラージュした同性愛男性向けのメディアであるフィジック雑誌が創刊され、大きな市場となった。この、フィジック雑誌とPC誌が併存した1950-60年代の表象を分析することで、両者における男性身体理想像に差異があったかを確認することができるはずであり、セクシュアリティによる理想の違い、あるいは相似を確認することになる。また、それ以降は半ば公式にメディアがセクシュアリティ別に成立することになったわけであり、その後の両者の表現を見れば、各々のセクシュアリティ化の契機も見えるはずである。

資料収集に関して、これらは大衆的な商業雑誌であるため、一部にまとまった号数のコレクションや復刊本がある以外は、海外の古書店やオークションを通じて長期間にわたって収集する必要がある。

研究初年度には、1930年代から1970年代までを対象としたおもな分析対象となるタイトルのひとつである「Strength and Health」に関しては、80%以上の収集を完了した。また、比較対象である「Physique Pictorial」に関しては、研究計画ではアメリカのアーカイブにおける閲覧コピーを行う予定であったが、当該研究機関(ポプ・マイザー財団)がその雑誌の表紙の多くをウェブ上で公開しているため、実際の訪問・内容分析に先んじて、既に両雑誌の比較検討を開始することができた。

また最終年度には、各雑誌の収集を継続しながら、関連資料の閲覧・収集のためコロン

ピア大学を訪問し、理論を含めた整理と仕上げを行った。

4. 研究成果

本研究の結果、以下の点が明らかになった。

(1) 1930-50年代にかけて、フィジカル・カルチャー誌における男性身体理想はセクシュアリティ化されておらず、さまざまな欲望の対象として共有されていた。この時期においては、まだ異/同性愛というセクシュアリティの腑分けが明確化されておらず、従ってホモソーシャル/ホモセクシュアルな欲望の分断も曖昧であった。

(2) 1950-60年代にかけて、フィジカル・カルチャー誌は非ヘテロセクシュアル要素(同性愛と混同される要素)を急速に払拭し、ヘテロセクシュアリティ化を始める。そして、こうしたヘテロノーマティブな男性性(ホモソーシャルな理想)への変化を促したのは、この時期に進展した“同性愛者”のアイデンティティ形成とそのカテゴリーの可視化による、逆説的なヘテロセクシュアリティの自覚化であった。

(3) 70年代以降の性的マイノリティ権利運動および80年代のエイズ危機は、ともにその社会的な広がりや影響力の大きさからカウンターとしてのホモフォビアを苛烈化させ、結果としてフィジカル・カルチャー誌がヘテロセクシュアル表象を強調していくことにつながった。

こうしたフィジカル・カルチャー誌における男性表象の変遷は、男性性の概念や理想が歴史的に変遷し、必ずしもヘテロノーマティブである必要がない可能性を示唆している。セジウィックは、社会におけるホモセクシュアル/ヘテロセクシュアル領域の区分が歴史的であり、なおかつそれぞれがどのようなジェンダー観(理想像)と切り結ぶかも多様・曖昧で交錯しているとし、この矛盾は近代から現代を通して常に維持されてきたと述べる(セジウィック, 1999, pp.123-127)。そして、男性の関係性に関していえば、男性同士の利益を促進するホモソーシャルな関係性と、男性同士の欲望に基づくホモセクシュアルな関係性の間には連続性がある。ホモソーシャル連続体とし、なおかつ、それがあつた時代的な配置においては分断されてしまっている(ようにみえる)ことを示した(セジウィック, 1999, 2001)。

これは、いうなれば現代における男性のホモソーシャルな関係性というものが、連続性なき連続体として維持されてきたと捉えることもできる。こうしたセクシュアリティとジェンダーの理想との複雑な配置を考えるとき、特に1950年代以前のフィジカル・カ

ルチャー誌における表象は、ヘテロ/ホモセクシュアルの境界で分断されない男性の母集団によって、ある種の理想的な男性ジェンダー像が共有されていた時代がありえた。

つまりある歴史・社会的な配置によってはホモソーシャル連続体が存在し得る可能性を示しているともいえる。そしてこの事実は、当然ながら今後の社会状況や価値観の変化によっては、男性性(男らしさ)のみならず女性性も含めたジェンダー的な理想が移り変わり、なおかつ一つの理想に収斂することなく多様なかたちで存在しうる可能性をも示唆しているといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

岡田 桂、セクシュアリティ化される男性性の理想：1930-80年代の米国フィジカル・カルチャー雑誌における男性身体表象とホモソーシャル連続体、*体育学研究*、査読有、61巻(1)、2016、pp.197-216

DOI:http://dx.doi.org/10.5432/jjpehss.15110

岡田 桂、性をめぐるアリーナ：スポーツにおける男性優位主義とホモノーマティブな男性性、*現代スポーツ評論*、査読無、33号、2015、pp.81-90

[学会発表](計2件)

岡田 桂、新たなスポーツ・マスキュリニティ研究に向けて、*日本スポーツ社会学会第26回大会*、2017年3月18日、信州大学教育学部(長野県長野市)

岡田 桂、セクシュアリティ化される男性性、*日本スポーツとジェンダー学会第14回大会*、2015年7月5日、明治大学駿河台キャンパス(東京都千代区)

[図書](計2件)

岡田 桂、「クィアと法」、*綾部・谷口他編著*、法律文化社、2017年刊行予定(ページ範囲未定)

岡田 桂(担当:分担執筆)、「21世紀スポーツ大事典」、*中村・高橋他編*、大修館書店、2015年、pp.165-166、pp.265-266、pp.312-313、

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田 桂 (OKADA, Kei)
関東学院大学・国際文化学部・教授
研究者番号：90386657

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()